

2017年8月24日／浪宏友ビジネス縁起観塾

もっとも愛しい者

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含經典2』（ちくま学芸文庫）／詩（偈）のある經典群／拘薩羅相應／4愛する者、8マッリカー（末利）

(2) 主題

この世で一番愛しいものは自分であるということについて、学びたいと思います。

2. パセーナディ王

コーサラ（拘薩羅）国のパセーナディ王は、成道して間もない釈迦牟尼世尊と出会いました。その時の様子は、「若しとて」と題する阿含經の經文（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.381、拘薩羅相應／1若しとて）に記されています。二人は同年齢だったそうです。

パセーナディ王は、しばしば世尊のもとを訪れては、教えを請いました。ここに紹介するエピソードもそのひとつです。

サーヴァッティ（舍衛城）は、コーサラ国の都城です。

3. 自分よりも愛しい者はあるか

(1) 經文

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァッティ（舍衛城）のジェータ（祇陀）林なるアナータピンディカ（給孤独）の園にましました。

また、その時、コーサラ（拘薩羅）国の王パセーナディ（波斯匿）は、その夫人のマッリカー（末利）とともに、高樓に登っていた。そこで、コーサラ国の王パセーナディは、マッリカー夫人にいった。

「マッリカーよ、そなたには、そなた自身よりももっと愛しい者があるであろうか」

「大王よ、わたしには、わたし自身よりもっと愛しい者はございません。大王よ、王さまには、誰ぞ王さま御自身よりも愛しい者がございましょうか」

「マッリカーよ、わたしにも、わたし自身よりもっと愛しい者は誰もいない」

（増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.399／ここには、パセーナディ王の言葉「マッリカーよ、わたしにも、わたし自身よりもっと愛しい者は誰もいない」がありません。「増谷文雄編訳『阿含經典第四卷』筑摩書房、p.79」により補いました）

(2) 自分よりも愛しい者はあるか

コーサラ国のパセーナディー王とマッリカー王妃は、ある日「自分自身よりも愛しいものがあるだろうか」と話し合いました。

二人とも「自分自身よりも愛しい者はいない」と告白し合いました。

これまで釈迦牟尼世尊から、自分本位を戒められてきた二人です。自分たちが「自分よりも愛しいものはない」と思っているという事実は、いささか気がかりだったにちがいません。

4. 自分よりも愛しい者はいない

(1) 経文

そこで、コーサラ国の王パセーナディは、高樓を下って、世尊を訪れた。訪れると世尊を拝して、その傍らに坐した。

傍らに坐したコーサラ国の王パセーナディは、世尊に申しあげた。

「ところで、世尊よ、わたしは、マッリカー妃とともに高樓にあって、マッリカー妃に申しました。『マッリカーよ、そなたには、そなた自身よりももっと愛しい者があるであろうか』と。世尊よ、すると、マッリカー妃はわたしにこう申しました。『大王よ、わたしには、わたし自身よりももっと愛しい者はございません。大王よ、王さまには、誰ぞ王さま御自身よりも愛しい者がございましょうか』と。世尊よ、そういわれて、わたしは、マッリカー妃にこう申しました。

『マッリカーよ、わたしにも、わたし自身よりももっと愛しい者は誰もいない』と』」（同書、p399~400）

(4) 自分よりもいとしい者はいない

パセーナディ王は、釈迦牟尼世尊を訪れて、王と王妃の会話の次第を申し上げました。

自分たちは、「自分自身よりも愛しいものはない」という結論に達したけれども、それでいいのかどうかという問いかけです。

5. 自分より愛しい者を見出すことはできない

(1) 経文

すると、世尊は、その意味を知って、その時、このような偈を誦したもうた。

「人の思いはいずこへも赴くことができる

されど、いずこへ赴こうとも

人はおのれより愛しい者を見出すことはできない」（同書、p400）

(2) 自分より愛しい者を見出すことはできない

釈迦牟尼世尊の答えは「人は自分よりも愛しい者を見出すことはできない」というものでした。パセーナディ王とマッリカー王妃の気持ちは、肯定されたのです。

6. 他の人々も同じ

(1) 経文

「それとおなじく、他の人々にも、自己はこのうえもなく愛しい

されば、おのれの愛しいことを知る者は、他の者を害してはならぬ」（同書、p400）

(2) 他の人々も同じ

「自分よりも愛しい者を見出すことはできない」のは、自分だけではないのです。他の人々も、みんな自分が一番愛しいのです。

(4) 他人を害してはならない

「自分の愛しさが分かるならば、他人を害してはならない」と、釈迦牟尼世尊は諭しました。自分の愛しさが分かる人なら、他人への思いやりも生まれるはずなのです。

(4) 執着心ではない

「自分が愛しい」と言っても、自分に執着しているわけではありません。純粋な気持ちで自分を愛しいと思うのです。そして、自分を大切にしたいと思うのです。

自分を純粋に愛しいと思うからこそ、「他の人も自分が愛しいにちがいない」と思えるのです。

7. 大切な人

(1) 愛しい者

「愛しい者」は、「大切な人」であり、「かけがえのない人」です。

自分を大切に思う人は、自分に関わりのある人や物を大切に思うことでしょう。「自分が一番大切である」ということは、あらゆるものを大切に思う原点であると思われます。

(2) 利己心の拡大

庭野日敬師は、「利己心の場を拡大せよ」と語っています（庭野日敬師著『人間らしく生きる』冬樹社、昭和36年12月26日初版発行、p. 204）。概要は、次の通りです。

まず、利己心を家族にまで拡大します。つぎに、友人、同僚にまで拡大します。さらに、町内にまで拡大します。こうしてだんだんに拡大して行って、国にまで拡大し、ついに世界にまで拡大すれば、その人は聖人と呼んで差支えないであろうとあります。

そして、これは仏教における「煩惱即菩提」という教えであると述べています。

8. ことわざ

(1) 己の欲せざる所は人に施す勿れ

孔子が弟子の子貢に「一生守ることができる徳目はないでしょうか」と聞かれたときに、「其れ恕(じょ)か。己の欲せざる所は人に施す勿(なか)れ(それは、思いやりというものだ。自分がして欲しくないことを、人にするべきではない)」と答えたそうです。

この「己の欲せざる所は人に施す勿れ」が、ことわざとなっています。

(2) 己の欲するところを人に施せ

『新約聖書』に、次の一節があります。

「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ」(「マタイによる福音書第7章12節」。日本聖書協会2001年発行の口語訳聖書から)

この言葉が「己の欲するところを人に施せ」ということわざとして流布しています。

8. 自己を愛する

(1) 経文

「かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、サーヴァアッティー(舎衛城)のジェータ(祇陀)林なるアナータピンディカ(給孤独)の園にましました。

その時、コーサラ(拘薩羅)国の王パセーナディ(波斯匿)は、世尊を訪れ、世尊を礼拝して、その傍らに坐した。

傍らに坐したコーサラ国の王パセーナディは、世尊に申しあげた。

『世尊よ、わたしは独りしずかに坐して思索している時、かようなことを考えました。〈いきたい、いかなる者がほんとうに自己を愛するのであろうか。また、いかなる者は真に自己を愛してはいないのであろうか〉と』」(増谷文雄編訳『阿含經典2』ちくま学芸文庫、p.390~391)

(2) いかなる者

「いかなる者」の「いかなる」とは、どのようなことを考えているか、どのようなことを行なっているかということだと思われます。

どのようなことを考え、どのようなことを行なっている人が、自分を愛している人なのか。また、自分を愛していない人なのか。

ここで「愛する」とは、「純粋な気持ちで、心の底から、大切に思っている」ことだと考えられます。

9. 自己を愛していない者

(1) 経文

「世尊よ、そして、わたしはかように考えました。

なにびとであろうと、その身によりて悪行をなし、その口によりて悪語をいだし、その意において悪事を思わば、それらの人は真に自己を愛する者ではあるまい。たとい彼らが〈自己はわが愛するところである〉といったとしても、彼らは真に自己を愛する者ではないのである。なんとなれば、彼らは、愛せざる者が愛せざる者にたいしてなすことを、彼らみずからにたいしてなしているからである。だから彼らはけっして自己を愛する者ではないのである」（同書、p. 391）

(2) 自己を愛していない者

パセーナディ王は、次のような人は自己を愛していないと考えました。

- ・自分の身によって悪行を行なう。
- ・自分の口によって悪語を語る。
- ・自分の心の中で悪事を思う。

(3) 悪を行なう

「愛せざる者が愛せざる者にたいしてなすことを、彼らみずからにたいしてなしている」とあります。

「愛せざる者」とは、ここでは「敵対する者」でありましょう。敵対する相手は亡ぼしたいのです。相手を亡ぼすために、さまざまなことを行なうのです。

悪を行なう者は、自分を亡ぼすことを自分に対して行っているのです。自分に敵対する者が自分に対して行なうことを、自分で自分に対して行っているのです。

(4) 自分の悪に気づかない

「たとい彼らが〈自己はわが愛するところである〉といったとしても、彼らは真に自己を愛する者ではないのである」とあります。

本人は、自分のためになることを行なっているつもりでも、実際には、自分を亡ぼすことを自分に対して行っているのです。とても、自分を愛しているとはいえません。

(5) 悪の報い

「悪」とは、仏教では「真理から外れた行い」を言います。

「真理から外れた行い」をしますと、自分を衰退させるばかりです。

10. 自己を愛する者

(1) 経文

「また、なにびとであろうとも、その身によりて善行をなし、その口によりて善語をかたり、その意において善事を思わば、それらの人はほんとうに自己を愛する者であろう。たとい彼らが〈自己はわが愛するところにあらず〉といったとしても、彼らはほんとうに自己を愛する者なのである。なんとなれば、彼らは、愛する者が愛する者にたいしてなすことを、彼らみずからにたいしてなしているからである。だから、彼らはほんとうに自己を愛する者なのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.391）

(2) 愛する者にたいしてなす事

パセーナディ王は、次のような人は自己を愛していると考えました。

- ・自分の身を使って善行をする。
- ・自分の口で善語を語る。
- ・自分の心に中で善事を思う。

(3) 善を行なう

「愛する者が愛する者にたいしてなすことを、彼らみずからにたいしてなしている」とあります。

「愛する者」とは、家族や友人など、「幸せになってもらいたい人々」のことでありましょう。人は、幸せになってもらいたい人のために、さまざまなことを行ないます。

善を行なう人は、自分を幸せにすることを自分に対して行っているのです。自分を幸せにしたいと思ってくれる人が、自分に対してしてくれることを、自分で自分に対して行っているのです。

(4) 知らず知らずに幸せになる

「たとい彼らが〈自己はわが愛するところにあらず〉といったとしても、彼らはほんとうに自己を愛する者なのである」とあります。

本人には、自分の幸せのために行っているという気持ちがなくても、善を行なっている限り、必ず幸せな日々が訪れるのです。

(5) 善の報い

「善」とは、仏教では、「真理に合った行い」を言います。

「真理に合った行い」をすれば、自分が成長して、ますます「善」を行なえるようになります。多くの人は、幸福になろうと思って、かえって四苦八苦しています。

幸福になろうと思うよりも、善を行なおうと思えばいいのです。善を行なえば、自然に幸福になるのです。

1 1. 釈迦牟尼世尊による証明

(1) 経文

「大王よ、そのとおりである。大王よ、そのとおりである。なにびとであろうとも。その身・口・意によって悪業をなすものは、真に自己を愛する者ではない。なにびとであろうとも、その身・口・意によって善業をなすものは、真に自己を愛する者である」(同書、p. 391)

(2) 釈迦牟尼世尊が証明する

パセーナディ王の考えを、釈迦牟尼世尊が、その通りであると証明しました。

1 2. 偈頌

(1) 経文(偈の右側に要旨を示しました)

「世尊はそのようにいった。そして、かさねて偈を説いていった。

『みずからを愛すべき者と知らば
みずからを悪に結ぶことなかれ
けだし、悪しき行ないをなす人には
安楽は得がたきものなればである
すでに死魔のとりことなって
やがて生命を捨つべき人には
もはやなにものか彼のものたらん
なにをもちてか彼は行かんとする
ただ善業と悪業との二つは
人がこの世において作りしもの
それこそは彼みずからのものにして
それをもちて彼は行くのである
影のかたちにそうがごとく
この二つは彼に従うのである
されば、人はただ善業をなして
未来のために積むがよろしい
功德こそは後の世における
人々の渡場であるからである』」

悪を行なう者は安楽を得難い。

生前にどんなものを持っていようとも、死後の世界に持って
いくことはできない。

生前になした善い行いと悪い行いは、死後の世界にまで、影
が形に添うようについていく。

善い行いをすることが、安楽世界に向かう渡し場である。

(同書、p. 392~393)